

平成22年 4月12日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530822
 研究課題名(和文) 地域コミュニティ参画型道徳教育実践プログラムの実効性に関する日米
 中比較研究
 研究課題名(英文) The Comparative Study on the Effectiveness of Moral Education
 Programs focusing on Community Service among the U.S., China, and Japan
 研究代表者
 伴 恒信(BAN TSUNENOBU)
 鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授
 研究者番号：70173119

研究成果の概要(和文):世界の道徳教育の新しい潮流が、子ども達を学校教育の場に止まらず、広く地域コミュニティの活動に参画させながら彼らの社会認識を広め、道徳的実践力を涵養させる方向に進んでいる。変容激しい社会変化のなかで儒教的社会規範が薄れてきている中国と日本の子ども達の道徳的社会行動を比較分析すると、子どもの「規範遵守」態度ならびに「礼節関与」姿勢の形成には共通して教師・親・友人などの人間関係の影響力が大きいことが明らかになった。またアメリカでは、子ども達を地域のコミュニティ活動に参画させる教育事業のために多大な国家予算と支援組織を築き上げてきている。これは、子ども達のコミュニティへの実践的参画を促すことが子どもの市民性涵養のための有効な手段との評価に基づいている。

研究成果の概要(英文): The new current of the moral education in the world is progressing in the direction of making children take part in activities of regional communities, while training them to cultivate social and moral consciousness in the place of school education. When making the comparative analysis of the children's moral behavior of Japan and China where Confucian social norm is fading in the radical social change, I found that the human relationships of a teacher, parents, a friend, etc. with children have an important effect on a child's "norm observance" attitude and contribute to the formation of a "courtesy participation" behavior in these two countries. Moreover, a large amount of national budget in the U.S. has been subsidized through the agencies built up for an educational business that promotes participation of children in the community services. The practical services and participation of children in the community is valued as important vehicles for training and cultivating civic responsibilities.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：道德教育

1. 研究開始当初の背景

(1) **アメリカの道德教育に関する調査研究の実績** 一伴は、1990年代にアメリカのキャラクターエデュケーションが連邦政府に施策に取り入れられるようになる以前から現地での観察調査を続けてきており、2002年刊の押谷・伴共著編『世界の道德教育』では、「アメリカの思想の系譜と道德教育」と題する章で植民地時代にまで遡ってキャラクターエデュケーションのルーツを追跡して論述している。

(2) **道德教育実践プログラムの開発と効果の科学的測定についての研究** 一伴と連携研究者の押谷は、長年にわたり道德教育と道德社会的な人格形成との関係性に関する共同研究を進めてきており、前年には全国各地の実践プログラムが子ども達の道德性形成に如何に寄与しているかの実証的研究を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の3つの点である。①欧米先進諸国で現在、社会価値の再構築へ向けての動きが起こり、地域コミュニティの再生による市民性涵養の教育政策が提案および実施されている。その具体的施策と社会背景を探る。②地域の教育機関が主導して、サービス・ラーニング等の奉仕活動を通じた子ども達の道德的実践力の育成に繋げているアメリカなどの教育施策の現状と仕組みを調査する。③儒教的伝統が人々の社会意識を規定していると言われている日本と中国といった極東アジアの子ども達の道德的社會行動は、変容激しい今日の社会において如何なる現状にあるのか、子ども達自身への質問紙調査を通じて明らかにする。

3. 研究の方法

上述の3つの目的それぞれに対応する形で、以下の研究調査の方法を用いた。まず目的の①に関して、国家を越えた民主主義の新たな価値枠組みに基づく市民性の育成を提唱するヨーロッパ協議会等のシティズンシップ教育の理念と実施状況を現地調査するとともに、ヨーロッパ大陸諸国とは異なった枠組みで展開されている英米のシティズンシップ教育を明らかにする。また目的の②に関連しては、サービス・ラーニング等の徳育に係るアメリカの教育施策の全貌を把握するとともに、全米組織の会議等を通じた現地調査を実施する。さらに目的の③に関して

は、中国および日本の子どもに対する道德的社會行動に関する質問紙調査を実施するとともに、中国の学校での道德教育カリキュラムとその実際を調査する。

4. 研究成果

本研究の成果についても、先述の「2. 研究の目的」ならびに「3. 研究の方法」の叙述の各3分野に対応する成果を述べていこう。

(1) 欧米先進諸国のシティズンシップ教育

① ヨーロッパ評議会シティズンシップ教育

ヨーロッパ評議会(Council of Europe)は、1949年、人権、民主主義、法の支配という共通の価値の実現に向けた加盟国間の協調の拡大を目的としてフランスのストラスブールに設立された。加盟国は46カ国(EU全加盟国、南東欧諸国、ロシア、トルコ、他)、オブザーバー国は5カ国(日本、米、加、メキシコ、バチカン)を数える。同評議会は、設立当初から特に人権、民主主義等の分野で活動してきたが、最近ではさらに、薬物乱用、生命倫理、サイバー犯罪、人身取引、テロなどの問題にも対応しており、各種条約策定、専門家会合の開催などの他、国際問題などに関する勧告や決議を採択したりしている。

報告者伴は、2008年9月22日に実際にストラスブールのヨーロッパ評議会を訪れ、シティズンシップ教育の担当者達から直接に話を聴取した。

ヨーロッパ評議会がシティズンシップ教育への取り組みを始めたのは、1993年の欧州連合(EU)の発足と軌を一にしており、ヨーロッパ域内の国境を越えた経済社会面での実質的な国家統合という現実を受けて、1997年、民主的シティズンシップ教育(Education for Democratic Citizenship and Human Rights)の推進を決議、文化的多様性を尊重しつつも国家枠を越えたシティズンシップのあり方を模索するところから出発した。

ヨーロッパ評議会の民主的シティズンシップ教育担当者によると、EDC(Education for Democratic Citizenship and Human RightsをEDCと略称する)Projectはその発展段階を3つの段階に分けられ、EDC Projectの第一期は1997年から2000までに該当し、主にその活動はEDCの定義の探求と展開に当てられたという。EDC Projectの第二期は、2001年から2004年までで、活動の焦点は教育政策と実践との架け橋の構築、シティズンシ

ップ教育政策の展開 と諸国間のネットワークの構築 にあった。ヨーロッパ評議会は、2005 年をヨーロッパ・シティズンシップ教育年(The 2005 European Year of Citizenship through Education)と定め、各加盟国でのシティズンシップ教育政策の実施枠組を構築し、持続可能なシティズンシップ教育プログラムを開発 するよう各国に呼びかけた。

現在は、2006 年から 2009 年までの EDC Project の第三期に当たり、すべての人々のための民主主義の学習と生活

がテーマとなっている。第三期の活動は大きく3つの系統に分けられ、(/L HCRIFWLR G FDWLR policy development and implementation for democratic citizenship and social inclusion、 /L HCRIFWLR H ROHV and competences of teachers and other educational staff in EDC/HRE、 /L HCRIFWLR HPRFUDWLF JRYHU D FH RI educational institutions) それぞれの系統において具体的な活動マニュアルを作成しているというのである。

②イギリスにおけるシティズンシップ教育

イギリスでは、2000年保守党サッチャー政権の下でナショナル・カリキュラムが導入され、さらに 2000 年にそのナショナル・カリキュラムの改訂がはかられた際、2002 年からキーステージ3および4の学年段階(11歳から 16歳)でのシティズンシップ教育の必修化が決まった。このシティズンシップ教育の必修化に大きな役割を果たしたのは、Bernard Crick を委員長とするシティズンシップ諮問委員会が 2000年に当時の教育雇用省大臣に宛てて提出した最終報告書 *Education for Citizenship and the teaching of democracy in schools* である。クリック・レポートと呼ばれる同書のなかで、Bernard Crick は次のように語っている。「シティズンシップ教育は法令化されるかどうかという問題を越えて重要である。もしうまく教えられ、その地域の要望にぴったりあうなら、そのスキル・価値は、学校から始まり、そこから広がり、民主的な生活において私たちみんなの権利意識も責任意識も高かまるだろう。」

こうした言説にも見られるように、必修化の背景には、移民の急速な増加や落ちこぼれ、怠学、少年犯罪等の教育の病理現象に翻弄されていた学校を生徒の意識から改革し、その効果を地域社会に波及させていこうとする意図があった。シティズンシップ教育のナショナル・カリキュラム指導書の冒頭にはその目的を以下のように述べている。「生徒はシティズンシップ教育を受けることによって地域社会、国、さらに国際社会での役割を効果的に果たすための知識、スキル、理解を得ることができる。シティズンシップ教育は生

徒に自分の義務と権利を自覚した、見識のある、思慮深い、責任ある市民になることを促す。またシティズンシップ教育は教室内でも、教室を離れても、生徒がより自信と責任をもてるようにさせながら、生徒の精神的、道徳的、社会的、文化的発達を促す。シティズンシップ教育を受けることにより、生徒は励まされ、学校、近隣、コミュニティ、あるいはもっと広い世界で貴重な役割を果たすよう努力するようになる。シティズンシップ教育により生徒はまた我々の経済、民主的な制度や価値についても学ぶ。つまり、生徒は国、宗教、民族のアイデンティティの多様性を尊重するようになり、生徒はこれらに関連した問題について考え、ディスカッションに参加する能力をも発達させる。

シティズンシップ教育はキーステージ3および4で行われる人格・社会性・健康教育(PSHE)のフレームワークによって補われる。」

現在のイギリスにおけるシティズンシップ教育の重要課題は、実際に各学校でシティズンシップ教育を担える力量を持った教師が少ないことで、教育省もその教師養成に力を注いでいるとのことであった。2000年9月11日にイギリス教育省(Department for Children, Schools and Family と改称)を訪問した時にも、担当のカリキュラム課長補佐の OD Clarke 氏に加え、シティズンシップ教育の教師養成教育を民間の法人で担当している Pete Pattison 氏を呼び、補足説明をお願いしていた。

(2)アメリカ合衆国の徳育に係る教育政策とサービス・ラーニング

①アメリカ連邦政府の徳育関係政策と予算

アメリカ合衆国の徳育を特徴づける要素に、①民主主義の理念とリーダーシップ、②実践性と科学的実証性、③地域社会との連携、の3つが挙げられる。そしてこれらの要素は、アメリカ合衆国の徳育に係る種々の具体的な教育政策のなかで、渾然一体となり融合して現れるものではあるが、各要素が突出して顕現する連邦政府の徳育関連の予算プログラムを挙げると、①の要素に係わっては Civic Education および、9,76、②の要素

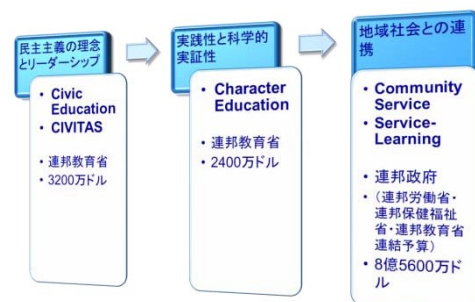


図1. アメリカ連邦政府徳育関連プログラムと 2000年度予算額

に関連しては Character Education、③の要素に関しては Community Service あるいは Service-Learning といった呼称で呼ばれるプログラムが連関づけられる。そして、これらのプログラムに対して 2008 年度に連邦教育省を中心に連邦政府が助成した額が以下に図示される。

一般にアメリカ国民は、日常生活の節々で人間の崇高な理念や夢を臆することなく語り、態度や行動にも明示的に表現する。それは子供のころから教育のなかで身体の一部に刷り込まれてきているものでもある。その典型の一つが自由と正義の建国理念である。アメリカの公立学校の教室にはほぼ例外なく合衆国の国旗が掲げられ、毎朝子供たちは始業前に胸に右手を当てる宣誓の姿勢で合衆国国民としての誓いを斉唱するのである。「私はアメリカ合衆国の旗に忠誠を誓います。そして、旗が象徴する共和国に、神の下でひとつであり、あらゆる人に自由と正義がある国に。」

この民主主義国家としてのアメリカの普遍的な理念を教えること、すなわちアメリカの民主主義の基盤を成す合衆国憲法や権利章典の理念と価値を、小学校から高校までの子どもに教育するプログラムは”Civic Education”プログラムとして2008年度には2000万ドルが予算化されている。さらに、ラテン語で「ローマ市民」を表す”CIVITAS International”プログラムは、ローマ帝国が政体や文化の違う民族の人々をローマ法の理念の下に同じローマ市民として扱ったように、アメリカの民主主義の精神を発展途上国や紛争国の人々に広めることを目的とし、1200万ドルが割り当てられている。

アメリカ版道徳教育である Character Education は、1990年代に全国的な教育運動として盛り上がりを見せるようになり、民主党のクリントン政権がその流れに先鞭をつける形で1995年から2001年までに全米48州とワシントンDCに100万ドルまでのキャラクターエデュケーション・パイロット・プロジェクトと称する連邦補助金を交付してきた。実際の教育権限を有する各州政府は、Character Education に対しても独自の施策を推し進めており、バージニア、ユタ、イリノイ州などのように州の学校法で必修と定める州から、ニュージャージー州のように州知事が多くの予算をつけながらも法制化まではしない州まで様々である。

この Character Education に対し、2008年度アメリカ連邦教育省は2400万ドルの予算をつけ、主として各州内の学校区より提出さ

れた Character Education の実践的プログラムを助成している。またアメリカ連邦教育省は、同省の下に Character Education プログラムの支援及び評価を行う下位機関として CETAC (2001年) と IES (2002年) を設立し、各地での助成プロジェクトを実施しての効果、科学的に評価することを求めている。

アメリカの徳育を特徴づける第三の要素③地域社会との連携については、地域コミュニティの社会活動に実践的に関わるなかでこそ民主主義社会を担う市民性が獲得できるというアメリカ人の伝統的考え方を、その徳育実践のなかに結実させた Community Service あるいは Service-Learning がある。ことに Service-Learning とは、学校の方から子ども達に地域コミュニティへの種々の貢献および奉仕活動 (Service) をするよう促すとともに、その経験から学んで (Learning) いけるようなカリキュラムを用意する一種の学社連携プログラムである。これら両者に対し、アメリカ連邦政府が1990年全米及び地域サービス法 (National and Community Service Act) に基づき、連邦労働省、連邦保健福祉省、連邦教育省の3省にまたがる連結予算として2008年度に計上した予算は、合計8億5600万ドルに上る。

②Service-Learning プログラムの実際

2009年3月18日から21日までテネシー州ナッシュビルで開催の「第20回全米サービス・ラーニング会議 (The 20th Annual National Service-Learning Conference)」での資料に基づく。

1) あらゆるところにピースキーパー (小学校、安全プログラム)

目的：子ども達は学校で思いやりの人間関係を援ける多様な解決方法と方略を学習する必要がある。彼らが先導者そして仲間として参加することで地域社会が良くなる。

プログラムの実際：教師による以下の役割を担う児童の指名

和平監視員 (3~4年生) - 運動場とスクールバスで起こる子ども間の問題を助ける。

訓練された調停員 (4~5年生) - 生徒同士の問題解決を調停する。

全ての児童ークラス内での葛藤解決の方略を学ばせ、実践させる。

ピースキーパーの役割を果たす児童は出来事を日誌に書き込み、教師はフィードバックを行う。出来事に係わる経験、考えや感想につきグループ討議をさせる。

2) 地域の汚染調査 (中学校、環境プログラム)

目的：汚染物質の地表流出について地域共同体に教え、スライドショーとパンフレットを用いて対処法を人々に啓蒙する。

プログラムの実際：水の使用法・汚染・居住環境への影響について事前に学習する。地域の水質調査委員会の代表者と状況視察を行い、雨水配水管を監視し、投棄された品目を記録するなど調査を実施し、発表を準備する。

□□アメリカ先住民の聖地回復（ハイ・スクール、社会改良プログラム）

目的：学校の敷地にある先住民（Gabrielino/Tongva）民族の歴史的聖地が荒廃されたまま放置されており、歴史的遺跡として復興させる。

プログラムの実際：学校の敷地にあるとうわさされていた Gabrielino/Tongva 民族の聖地の泉の存在を確かめ、復興の過程について学び、地域の Gabrielino/Tongva 団体に知らせ、復興のための活動計画を立てる。Gabrielino/Tongva 地方団体とともに、史跡保護指定の公的申請手続きを行い、地域社会に知らせる標識を作り、メディアに公表するため協力する。

地域社会ではこの泉の史跡指定と回復を祝い、祝賀会が開かれた。毎年 □□月にはハイ・スクールで、アメリカ先住民の芸術や技術を紹介する「コロンブス以前の時代の日」フェスティバルが開催されている。

(8)子どもの道徳的社会行動に関する日中比較調査研究

①研究目的 本研究は、これまで伴が実施してきた日豪、日米、日韓の国際比較研究と同様の視座に立って、同じ極東アジアの隣国にあって長年儒教的伝統の影響を受けてきた点では日韓と同じ地理的歴史的条件下にありながらも、政治体制を含め日本以上の急激な社会変化と価値変容に曝されている中国の子ども達を対象に、子ども達の道徳性や社会行動はどういう現況にあるのか、いかなる環境要因が関わり、また学校での道徳教育がどのくらいの影響力を有しているのかを解明することを目的にしている。

②研究調査の概要

調査時期：2007年 □□月－□□□□年月 □□月

調査対象者：小学校 4-5 年生

有効回答数：東京 9□□名、北京 □□□名

③調査結果（一部のみ）

学校生活における子どもの道徳的社会行動と意識に関する質問 20 項目について、因子分析を行ったところ 4 因子を抽出した。

因子 1 は、「先生の言いつけをよく守る」「担任の先生の指示に従う」「学校や学級のきまりを守る」などの項目からなる因子でした。この因子は、学校・学級で集団生活をする上での約束事や決まりを守っているかなどを問う項目が主に含まれているので『学校規範遵守』と名付けた。

(表1-1)「学校生活における子どもの道徳的社会行動と意識」に関する因子分析の結果

	1	2	3	4
先生の言いつけをよく守る	0.763	0.342	0.119	0.169
担任の先生の指示に従う	0.687	0.117	0.274	0.257
学校や学級の決まりを守る	0.609	0.259	0.225	0.245
先生に丁寧なことばづかいをする	0.545	0.434	0.043	0.049
係や当番の仕事責任持つする	0.427	0.239	0.348	0.173
自分の机の中や持ち物を整理する	0.402	0.216	0.268	0.079
自分の意見をはっきりと言う	0.155	0.668	0.112	0.090
学級の話し合いに積極的に参加する	0.248	0.570	0.189	0.144
学校で、ゴミを拾う	0.335	0.468	0.221	0.075
友だちに対して礼儀正しく接する	0.399	0.429	0.230	0.060
朝、先生に対して「おはよう」のあいさつをする	0.267	0.368	0.248	0.133
他の人と協力して学習する	0.072	0.045	0.547	0.068
わからないところを友だちに教えてあげる	0.105	0.389	0.527	0.033
困っている友だちがいたら助けてあげる	0.172	0.394	0.488	0.013
クラスの友だちの意見をよく聞く	0.297	0.257	0.473	0.205
授業の準備をしていく(教科書・宿題・体操服等)	0.281	0.094	0.398	0.079
学校や授業に遅れないように行く	0.314	0.107	0.322	0.139
授業中に友人とおしゃべりする	-0.277	-0.284	-0.029	-0.655
授業中、先生の話をおかない	-0.126	0.005	-0.250	-0.571
授業中にメールを打ったり、メモを回す	-0.051	-0.037	-0.011	-0.404

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

7 回の反復で回転が収束しました。

因子 2 は、「自分の意見をはっきり言う」「学級の話し合いに積極的に参加する」「学校でゴミを拾う」などの項目からなる因子でした。この因子は、他人との関わりにおいて、時と場面と場所に応じた態度やふるまいができるかをみる項目が含まれているので『学校礼節関与』と名付けた。

因子 3 は、「他の人と協力して学習する」「わからないところを友だちに教えてあげる」「困っている友だちがいたら助けてあげる」などの項目からなる因子でした。この因子は、自分と他人との関係において相互協力しながら作業や活動ができるかを尋ねる項目が含まれているので『学校協カレディネス』と名付けた。

因子 4 は、「授業中に友人とおしゃべりする」「授業中、先生の話をおかない」「授業中にメールを打ったり、メモを回す」の項目からなる因子であり、この因子は、授業以外のことに意識が向いている質問項目が含まれているので『学校授業逸脱』と名付けた。

次に、これら各因子の質問項目の回答を得点化し、各因子をそれぞれ一つの合成変数に転換して指標を作成した。そして、学校における子どもの道徳的社会行動に対して、いかなる要因が影響を与えているかを明らかにするため、先に述べた因子から作成した各合成変数の指標を従属変数に設定し、性別、兄弟数、学校の印象、道徳の授業の影響など、16 項目の説明変数による重回帰分析を行った。

まず、子どもの「学校規範遵守」指標に影響を及ぼす要因としては、両国ともに共通して「先生にほめてもらう」「先生にしかられる」「親にしかられる」「放課後に友達と遊ぶ」といった要因が大きな規定因となっていることが分かった。

さらに「道徳の授業が楽しい」と感じてい

る子どもほど、規範意識が高く、日本以上に中国の子どもの方に学校での道徳教育の効果が顕著に表れている。

変数	日本 (東京)			中国 (北京)		
	B	Beta	Sig. T	B	Beta	Sig. T
性別	0.409	0.056	0.044	0.553	0.119	0.000
兄弟数	0.099	0.019	0.469	-0.014	-0.004	0.896
学校が好き	0.197	0.045	0.138	-0.058	-0.016	0.856
学校に不安を感じる	-0.141	-0.037	0.175	-0.195	-0.075	0.020
道徳の授業が楽しい	0.309	0.072	0.030	0.478	0.171	0.000
道徳の授業に共感できる	0.607	0.149	0.000	-0.095	-0.034	0.374
道徳の授業が自分に役立つ	0.550	0.134	0.000	0.183	0.060	0.110
先生にほめてもらう	0.818	0.248	0.000	0.240	0.132	0.000
先生にしかられる	-0.983	-0.342	0.000	-0.507	-0.240	0.000
親にほめてもらう	0.195	0.063	0.037	0.110	0.058	0.113
親にしかられる	-0.180	-0.056	0.047	-0.153	-0.074	0.032
テレビの時間	0.033	0.017	0.579	0.095	0.055	0.048
放課後に友達と遊ぶ	0.102	0.057	0.040	0.220	0.096	0.003
ゲームをする時間	0.130	0.059	0.045	-0.010	-0.006	0.850
勉強をする時間	0.097	0.053	0.077	-0.056	-0.039	0.207
習いごとに通う	0.643	0.045	0.099	-0.043	-0.004	0.886
偏相関係数	0.706			0.602		
決定係数	0.496			0.270		

表2 学校規範遵守指標の多重回帰分析

また、日本の子どもに関しては、「親にほめてもらう」「ゲームをする時間」といった家庭における要因も「学校規範遵守」行動に大きな影響を与えている一方、中国では、学校への不安要因が規範遵守にマイナスの規定因となって影響を与えていた。

次に、「学校礼節関与」指標を従属変数に設定し同指標に影響を及ぼす要因を独立変数に設定すると、両国の子どもに共通して、「きょうだい数」「道徳の授業が楽しい」「先生にほめてもらう」といった要因が大きな規定因として現れた。その中でも、特に「きょうだい数」の影響性は両国間で対照的な値を示している。中国は 2010年より実施されている「一人っ子政策」によって兄弟のいない

変数	日本 (東京)			中国 (北京)		
	B	Beta	Sig. T	B	Beta	Sig. T
性別	-0.526	-0.088	0.004	0.216	0.051	0.107
きょうだい(兄弟姉妹)数	0.245	0.057	0.049	-0.216	-0.069	0.025
学校が好き	0.585	0.183	0.000	0.027	0.008	0.822
学校に不安を感じる	-0.137	-0.044	0.144	-0.282	-0.120	0.000
道徳の授業が楽しい	0.306	0.086	0.018	0.345	0.138	0.000
道徳の授業に共感できる	0.450	0.134	0.001	0.048	0.019	0.624
道徳の授業が自分に役立つ	0.604	0.177	0.000	0.187	0.068	0.072
先生にほめてもらう	0.658	0.241	0.000	0.377	0.229	0.000
先生にしかられる	-0.112	-0.047	0.154	-0.125	-0.055	0.060
親にほめてもらう	0.134	0.052	0.115	0.157	0.081	0.012
親にしかられる	-0.050	-0.021	0.491	-0.158	-0.085	0.015
テレビの時間	0.091	0.055	0.095	0.065	0.049	0.139
放課後に友達と遊ぶ	-0.022	-0.015	0.624	0.052	0.025	0.436
ゲームをする時間	0.119	0.085	0.044	-0.067	-0.045	0.169
勉強をする時間	0.008	0.005	0.865	-0.018	-0.014	0.655
習いごとに通う	-0.267	-0.023	0.451	-0.248	-0.097	0.002
偏相関係数	0.611			0.269		
決定係数	0.411			0.269		

表3 学校礼節関与指標の多重回帰分析

子どもが多くいるため、日本に比べ中国の子どもは、他人との関与の仕方を学ぶ機会が少ないようである。一方、中国の子どもにおいては「親にほめてもらう」「親にしかられる」といった規定因が高いことから、子どもが学校での他人への対応行動においても、親のしつけが大きく影響を及ぼしていること

が分かる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

- [雑誌論文] (計5件)
- ①伴恒信、子どもの就きたい職業の変遷と国際比較、児童心理、査読無、□月号 1R□□□□□□□□ pp.55-□□
 - ②伴恒信、アメリカ貧困地区のなかの「夢をかなえる学校」—ルールとマナーの人格育成力、児童心理、査読無、6月号 1R□□□□□□□□ SS□□□□□□□□
 - ③伴恒信、キャラクターエデュケーションから学ぶもの、初等教育資料、査読無、6月号、1R□□□□□□ 2007、SS□□□□□□
 - ④伴恒信、アメリカの学校に見る「集団」と「個」、児童心理、査読無、4月号臨時増刊 1R□□□□□□ 2007、pp.44-□□
 - ⑤押谷由夫、伴恒信、子どもの道徳社会的自己形成と道徳教育との関係性に関する調査研究、道徳と教育(日本道徳教育学会)、査読有、□□□号、2007、pp.□□46

[学会発表] (計3件)

- ①伴恒信、檀傳寶、佐藤文宣、田村和英、子どもの道徳的社会行動と道徳教育に関する中日比較調査研究 关于儿童道德性社会行为与道德教育的中日比较调查研究、第□回中日教師教育研究集会、中国北京、(北京師範大学)、□□□□□□□□□□
- ②伴恒信、中国の道徳教育と子どもの道徳的社会行動の調査研究、日本子ども社会学会第□□回大会(松山大学)、□□□□6.29
- ③Tsunenobu Ban, The Recent Development of Moral Education in Japan, World Congress on Civic Education (Sheraton Hotel R YH WLR □ H WHU□□ H RV□ LUHV□□ UJH WL D□□アルゼンチン、ブエノスアイレス) □□□□□□□□□□

[図書] (計1件)

- ①南本長穂、伴恒信編著、発達・制度・社会からみた教育学、北大路書房、2010、全206

6. 研究組織

□□□研究代表者

伴 恒信 (1 7681(12 8)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：7 0 1 7 3 1 1 9

(2)研究分担者

押谷 由夫 (26 , 7 1, □26 , 2)

昭和女子大学・大学院生活機構研究科・教授

研究者番号：1 0 3 4 1 9 2 6